

生きるとは？幸せとは？

重度・重複障害者にとって、生きるとはどういうことで、幸せとはどういうものだろうか。

講義の中で、重度・重複障害者の幸せについて考えた。しかし、考えがよくまとまらなかったため、「幸せとはどういうものか」、もう一度考えたいと思う。また、重複障害者にとって「生きるとはどういうことなのか」福島智先生の生き方・考え方から考えてみたいと思う。

まず、障害の有無に関わらず幸せに生きるために必要なことは、「人とのつながり、支える存在」「自分自身（特性・障害・病気等）の理解」「自分の将来を選択できること」ではないかと考えた。

人とのつながり、支える存在

この本の中で「福島先生が盲ろうになって苦痛だったことは『見えないこと、聞こえないこと』そのものではなく、『人とコミュニケーションできないこと』。」と述べられている。本の中で何度も、福島先生の孤独の世界が書かれていた。「人とつながっていることがどんなに大事なことか、多くの人に知ってほしい」と孤独を味わってきた福島先生が言っておられるように、人間はまわりの人と支え合いながら生きている。コロナ禍においてコミュニケーション不足や孤立を感じるようになってなおさら、人とのつながりは重要だと思った。

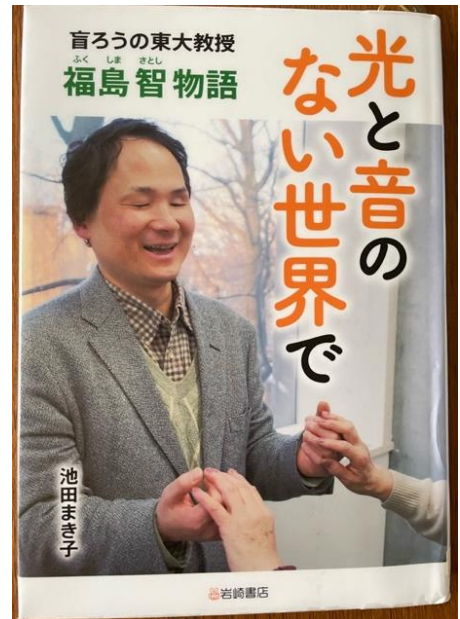
福島先生の家族やまわりの人々にとっても不安や心配、様々な思いがたくさんあるが、福島先生のためを思って行動している。助ける、支える、見守る…などやり方は様々あるだろう。支える存在はたくさんある方がいい。

自分自身（特性・障害・病気等）の理解

福島先生は入院、手術などを繰り返し、目と耳が回復しないという厳しい現実にも何度も直面してきた。絶望を味わい、自分の生きる意味を見つめた。自分のことを受け入れることで、自分にできることを考え、夢に向かってどう生きるのか見通しを持つことができたのではないと思う。

自分の将来を選択できること

自分の将来を選ぶ選択肢があることは重要である。福島先生は、1度目の大学受験において、盲ろう者を受け入れる環境が整っていないという理由から受けさせてもらえなかった。しかし、福島先生を支える人々の支援組織と進学への機会は平等であるべきという都立大学の理念のおかげで受験ができた。選択肢が増えるということは、自分の夢・世界・幸せが広がることにつながると思う。



福島智先生について

本講義の動画に出てきた福島智先生が盲聾で東大教授だということを知って驚いた。

「光と音のない世界で～盲ろうの東大教授 福島智物語～」では、福島先生のことを次のように紹介している。

東京大学教授福島智先生は、目が見えないうえに耳も聞こえません。福島先生は3歳のときに右目、9歳のときに左目からも光が失われ、盲になりました。さらに、14歳の時に右耳、18歳のときには左耳からも音が奪われて聾になり、二重の障害のある盲ろう者になったのです。（中略）盲ろう者として、日本で初めて大学に進学したばかりか、大学院まで進んで研究を続け、2008年には東京大学の教授に就任しました。

生きるとは、幸せとは・・・

「生きるとは、幸せとは、何か」という難しいテーマを選んだが、改めて自分の人生をどのように生きたいか考える機会となった。「生きるとは何か」ということについて、はっきり答えを出せる人がいるのだろうか。自分自身も答えを出せるのかわからない。福島先生はこの本で「私たち人間のもっとも重要な仕事は、『生きること』そのものにあるように思えてなりません。」と述べている。健常者であっても人生に不平・不満を言って生きづらい人生を送る人もいる。障害ということで生きにくくなっているのは社会の問題であると考え。障害があるからではなく、まわりが、社会が生きづらくしているのではないだろうか。そのために、特別支援教育を学び、インクルーシブ教育や共生社会を推進していく必要がある。

「幸せとは何か」について考えたとき、講義の映像の中にでてきた 2016 年に起きた相模原障害者施設殺傷事件の容疑者の言葉を思い出した。容疑者が「障害者は不幸を作ることしかできません。」と手紙に書いたと報じられた。自分の幸せは自分で決めるものである。他人が決めるものでは決していない。人生の豊かさ・幸せは、障害の有無関係なく、その人がどのように生きたのかではないだろうか。

「生まれてきてよかった」「夢に向かって充実した人生を送りたい」と誇らしく思えるような子どもたちを教員として育てていきたいと思う。

参考文献

池田まき子『光と音のない世界で～盲ろうの東大教授 福島智物語～』（株式会社岩崎書店、2014年8月15日発行）
08.相模原事件を考える | 東京大学 福島智研究室 <http://bfr.jp/pickuprepol/> 閲覧日 2023.1.2.